

『教育研究』一九六五年十二月（東京教育大学附属中学校）

授業技術と教師

矢口 新

(1)

長い間わが国では授業は教師に属するものと考えられて来た。教師は授業の中心人物である。自ら企画し、自ら演出し、自ら出演し、授業を切りまわして行く。従って授業技術といえば、教師その人の技術である。授業というものについてのこういう考え方は、教育というものの全体についての考え方に由来するのである。

授業の具体的場を構成するものはもちろん教師ばかりでない。まず生徒がいる。いな生徒がいるなどという言い方はよくない。実は生徒があつてこそ成り立つといつてよいものである。教育とは外ならぬその生徒を教育するのであるから、生徒こそ本命だと言つてよいであろう。教師は生徒を育てるためにいるのである。教師と生徒とが居れば授業の場が成り立つかといえば、多くの場合はそれだけでは成り立たないといった方がよいであろう。観念の上では成り立つても実際にはそれではうまくゆかない。いわゆる教材、教具などといわれるものがないと、現代の教育はもう成り立たなくなつているのである。

さてそこで授業が行なわれるのは何のためか、言うまでもなく生徒のためである。生徒の成長のためである。生徒が学習を成立させるためである。生徒が学習を成立させるといふのは、生徒が授業を受けているということと同様ではない。授業の場に臨んでいても学習は成

立しないかも知れない。いな経験ある教師は、事実そういうことがあることをよく知っている。学習とは、経験（これを授業という言葉に言いかえてもよい）による行動（この行動は身体的行動ばかりを言うのではない。心の行動と考える方がよい、身体的行動も結局は心の行動である。心というのをもっと生理学的に言えば、大脳と言つたら、もっと具象的かも知れない）の変容だという。学習が成立したというのは、授業を受けた結果、生徒の大脳の行動が変化したことを言うのである。われわれの間では、生徒が授業を受けていることを学習しているなどという。授業の場に臨んでいれば学習しているというが、本当は学習しているかどうかはわからない。その結果、行動に変容が生じたとき学習したというべきであろう。授業とは、何よりもまず学習が成立することを目ざして行なわれているのである。少なくとも行なわれるべきものである。現代の授業にそういう自覚が薄いとすれば、それはいつの間にか授業がマンネリズムに陥つてしまつたということである。

ところで学習の成立は如何にして生まれるのか？ つまり生徒の大脳の行動の変容はどうなされるのか？ このことの基本にある解答は、生徒自体が行動するということがあらゆることの根本である。大脳が行動できるようになるには、大脳自体が行動しなくてはならない。それが行動の変容をもたらすのである。ラーニング・バイ・ドゥーイングとはそれである。ドゥーイングとは大脳のドゥーイングである。それによつて、ドゥーイングできるようになるのである。行動が変容する。つまり学習したことになるのである。学習とは、生徒がどのようになつたかによつて、きまるのだといつてよい。

このように考えると授業の場というのは、何よりもまず生徒のドゥーイングの場でなければならぬ。生徒を、生徒の大脳を行動させる場としてあるべきものである。そこが授業の本命であつて、授業の場を構成するその他のもの、つまり教師も教材も教具も、その生徒の行

動を刺激し、引きおこし、活発ならしめるためにあるものだといいよい。一度そういう点から現代の授業の場は検討され直さなくてはならないであろう。

(2)

以上のような観点に立って、教師の授業における現代の問題を考察してみよう。現代の授業は教師中心の授業である。程度の差はあっても、本質的に教師中心である。どうしてそうなるかといえば、前に述べた根本が明確に自覚されていないからである。しかしそれはただ觀念の上で自覚されたというようなことでない。あらゆるものが、生徒を行動させるといふ考え方は反対の考え方に立って位置づけられているのである。このようにいふと人は反発を感じるかも知れない。しかししばらく論に従ってほしい。生徒のまわりにある教材、これは、生徒の行動をうながすようにはつくられていない。

第一に教科書である。教科書は教師が解説をしないで、生徒によって自発的に使用されるようにはできていない。いな反対に、教師が、教科書の解説をすることは前提となっている。それによってのみ、生徒は活動できるのである。このことは教科書についての現代の考え方から来ている。ひらたくいえば教科書とは、読んでおぼえることの書いてあるものだといいことである。このことは更に根本には、教育をうけるとは、教科書を読んでおぼえることだといふ考え方に基づいている。これは教科書についての考え方としていえば、読んで記憶すべきことが書かれてあるのである。いわば俗にいうバイブルなのである。そこには少しも間違つたことは書いてない。これは一種の前近代的な教科書観であるが、現代日本ではこのような考え方がやはり圧倒的であり、それ故に憲法違反的な検定制度も存在する。何故ならそのバイブルを統制しておけば、それをおぼえさせるのが教育であり、そこに

誤つた思想は普及しないといった考え方である。そういう全体的な体制の中で教科書が存在し、その解説者としての教師が存在し、それを受けとるのが生徒だというように置かれているのである。教室で最もよく使われる言葉に、「わかつたか、おぼえておけ」というのがあるが、生徒はそういう立場におかれているのである。教師の解説をわかるように努力する。そしてわかつたことをおぼえておけといわれるのが生徒である。

この場合の生徒のおかれ方は、五十人一学級という学級制度の中で一斉授業という形態の中で行動するという前提のもとにある。五十人がみんな一斉にするというのがほぼきまつた前提である。生徒五十人が一斉に行動するというのは基本的に受身におかれるということである。一人一人が自らの行動をするという建て前では一斉授業は成立しない。やはり結局は教師の解説に従ってそれを受けとることが主となる。ここで授業は教師のペースになる。何も意識して教師が自分のペースにするわけではないが、結局五十人の平均としての教師のペースである。しかし一人一人にとっては平均なんていうものは意味をなさない。ついて行けるペースか、ついて行けないかである。どちらにしても教師の表現するものに生徒は目をむけていなくてはならぬ。教師の一举手一投足が生徒の関心の的である。生徒は常に教師のいうことをわかつたうとしなくてはならない。教科書がわかるのも、教師を通じてである。

こう見ると、授業とは教師の活動を中心として引きおこされる学級の一体的活動であつて、教師によつて動かされる学級という集団の活動が授業であろう。授業の技術とは、だから教師の技術である。教師は太陽系の中心であり、一切はそれを中心にして動く、授業は教師の自作、自演、自監督による舞台芸術である。

(3)

しかしこういう授業が生徒の教育になっているといえるかどうか。教育とはそういう形のものだとしてこれまであまり疑問をさしはさまなかったが、もし生徒が自らドゥーイングすることによって、学習を成立させるのだとしたら、一斉授業の中で、一人一人の生徒がどれくらいドゥーイングしているかを考えてみてよいであろう。

生徒は教師の教材解説を聞いている。教師は生徒に考えさせたりやらせたりしているつもりであるが、五十人が一かたまりで考えているのであって、必ずしも一人一人は考えたり、やったりしていないこともあるであろう。たとえば自然の事柄について勉強をするとする。本来に自然を勉強するならば、生徒は自然に自分がぶつかって行かなくてはならぬ。そして自分のペースで考えなくてはならぬ。教師が考える筋とペースにのっていたのでは、自分の責任で自然に向かってドゥーイングしていることにならない。教師が平均のペースで解説をして行けば、話を聞いているものはわかったような気にはなるかも知れないが、自分で責任をもって、自分の頭で対象と対決したのではない。そこに自然というものに対する対し方でも、本当に生徒の身につくことがないであろう。現代の教育の中心に動いているモチイフは「わかる」ということだといってもよい。教育とはわからせることだというように考えて、誰も疑わない。そのことが教師の教材解説というような活動を非常に重要なものとして前面に押し出したのである。しかしそのわかるというのも、人の話を聞いてわかるのではなく、実はその話の内容となっている、自然の事実、社会の事実を、自分の頭で処理できる、自分で整理して、自分の論理で語ることが本当のわかるである。実はわかるのではなく、自分でできるといふことなのである。教師が語ったことがわかるでなく、教師の語っているそのものについて、自分も教師なしで語る

ことができることなのである。

そのようなできる段階に生徒をもってゆくことが、授業という場を設けて、生徒に活動させる所以なのである。だから授業というのは、教師が活動してはだめなのだとも言いうる。少なくとも、教材解説などということは教師のやるべきことでない。むしろ生徒自らが一定のプロセスをふんで自ら認識し、自ら解説することができるようになることなのである。

生徒に与えられるものは、生徒が対決しなくてはならぬ当面の対象である。それに対して、どう対決するのか、いかなるプロセスを経て、それをどう解いて行くのかは、生徒自らが、一人一人が体験し、結果を自ら生み出して、行かなくてはならない。そこに、生徒の脳が働く能力を獲得するのである。ものに対してどう行動するかを脳がおぼえるのである。一度で、おぼえられなければ、くりかえしドゥーイングすることによりおぼえるのである。おぼえるというのは、脳が行動の仕方を身につけるといふことである。これを定着というのである。

こう考えると、教師は生徒をドゥーイングさせるために働かなくてはならない。いな教師ばかりでなく、いわゆる教材といわれるものも生徒にドゥーイングというプロセスをたどらせるようになっていくなくてはならぬ。自然のある事柄について、究明した理くつが書いてある教科書でなく、それを究明するプロセスをたどらせるような材料が出ていたり、そのプロセスをふませるような指示が出ていたりしてはならぬ。あらゆるものが生徒を活動させるようにつくられて、授業の場が、本当に生徒の能力を育てる場となるであろう。

(4)

こうなると来ると授業の技術とは、単なる教師の技術ではなくなる。もっと幅の広い地盤からつくられて来るものである。

例えばプログラム・テキストが使用されるとする。プログラムは授業の技術の教科書的表現である。つまり教科書が、授業の技術をとることなのである。それは教師のもう一つ手前のプログラマーによって、構成される。それはいわゆる教育ビジネスといわれる分野の仕方であるだろう。その分野が近代化し、拡充し、本当に教育の現場をバックアップするようになれば、必然的に、そういう教科書が生まれるであろう。現にアメリカがそうなりつつある。授業とはそうなれば、社会のもつ教育力の技術的な表現となるわけである。

そうなれば、これまでの教師の仕事のかなりの分野が削減されよう。生徒に語りかけ、考えさせるよう指示したことは、かなりまでテキストがやってくれる。しかも一人一人に対してやってくれる。これまで教師は集団に対してやっていたから、到底徹底してはやらなかった。しかもそのエネルギーは大変であった。今度はそういう点はなくなる。これまでのような仕事が教師の一番大切な仕事だと考えている教師は、プログラム・テキストの出現によって、失業したと思うかも知れない。しかしそうではない。実は、それではじめて本来の教師の仕事にたどりついたのである。

教師はこんどは、いつも集団を相手に教材を解説するなどという仕事からは解放される。そして教育の本来の使命である一人一人に接することができる。一人一人がどういうように勉強しているか、どう学習を成立させているか、どこに問題があるか、すべての労力をそういった教育の仕事にかけられる。これまで教師は一人についてそんなに時間をかけて、相談してやり、行くべき道を指導したなどということはない。これまでは五十人の中の一人一人としてそれなりに一人一人を見ていた。それで十分だと思っていた。だからそれ以上にやることがないように思っている。しかしそこに大きな現代教育のマンネリズムがある。一人一人の人間の能力を育ててやること、そういう構えが

現代の教師には欠けているのである。五十把ひとからの教育の中で教師はそれにならされてしまつて、本当の意味の人間開発の技術を身につけないでしまつていたのである。

以上は併しまだ一つの事例的な意味で述べたにすぎない。プログラム・テキストというような教科書のあり方を一つとりあげても、そこに大きな変革が来るであろうということを述べただけなのである。その根本にある考え方は、あくまで一人一人を大切に育てるといふ考えである。それを根本にしてまだまだ多くの点で、現代の授業にメスが入れられなければならない。いな、授業というものの構造的転換がはかられるであろう。それは教育のシステムの転換である。最近アメリカあたりで漸く実験研究が活発になり、或は既に実験の域を脱したといわれている、無学年制の学校である。これも一人のドゥーイングを基本にして、一人一人の能力を育てるといふ考え方を徹底すれば当然出て来る制度的な帰結である。同じ年に生まれた者が十数年の間一斉に歩調を揃えて、進まねばならぬということはない。しかもすべての教科を一斉に通過する筈などという仮定は考えてみれば乱暴である。一人一人がそれぞれの教科にみなペースがちがつてよいではないか。能力の上下よりも、能力の方向のちがいであろう。その能力を最善に育て、一人一人を大切にするのが教育であらう。そのためにシステムが切りかえられるのである。こうなると学級王国などというものは雲散霧消するべきものである。学校の組織は根本的にかわるであらう。教師のチームによる教育も行なわれることになる。教師の授業の技術といわれるものは、そういう地盤の上で変貌をとげなければならぬ。

近代的教師はもはや学級王国の職人たることに甘んじるべきではない。

(日本生産性本部プログラム研究所長)